

# 知の発信拠点。

明治から大正・昭和・平成、  
そして未来へ。

古地図から、当時の本学や教育、時代が見えてくる。

編集部 ■ ご覧になっていた古地図には、本学のかつての地名「今川小路」が記載されています。まず、当時の状況などについて、日高理事長・学長からご説明いただけますか。

日高理事長・学長 ● いま見せてもらった古地図は、おそらく本学が専修学校から旧制大学に移行した頃だと思います。そうすると日本の高等教育、いわゆる大学教育制度がある程度出来上がった時期でしょう。

本学が創立されたのは1880（明治13）年。東大でも、法律や経済などの授業を外国語でしかやらなかった時代です。本学は国を支える法律、経済を、「日本語の頭で考える」。そういう人材を身分に関わらず広くつくらなければいけないと、スタートしました。

編集部 ■ 現在は、どうなっているのでしょうか。

日高理事長・学長 ● 大学生の約80%は、私大です。国公立大学の学生は、約20%しかいません。

また、社会の骨格を支えている大卒の多くは、私大出身であるということを考えると、本学の創立者たちは先見の明があったと思います。

編集部 ■ 甘竹会長のお考え、あるいは企業経営者としてのご意見はいかがですか。

甘竹校友会会長 ● 私は本学を卒業しましたが、

日高義博

学校法人専修大学理事長  
専修大学長 法学博士

甘竹秀雄

専修大学校友会会長  
株式会社アマタケ 相談役

4人の創立者たちに本当に感謝していますし、彼らを「すごい」と思っています。

まず、「武力」じゃなく「知力」で、この国を変えようという考え方。しかも、明治の初めですから。当時の「学校をつくる」「教育」というテーマは、いまの時代にもぴったり合いますね。いまの政治にも、「知力」をもっと使ってもらいたい（笑）。

自分の頭で考え、未来を切り拓く「知力」が不可欠。

編集部 ■ 「知力」は今後、ますます強く求められる……。

日高理事長・学長 ● これからは、自分の行き先が見えにくい時代です。そうしたときに、自分の頭で考え、問題を解決していくことが求められます。そのためには「知力」「知識」が土台になって、切り拓いていかなければいけない。

それで専修大学の21世紀ビジョンに「社会知性の開発」を掲げています。

「知力」というキーワードに連動するのは「文化」だと思います。法律も経済

質素でも真摯に生き、学問や職業を積み上げていく。これが専修大学の「羅針盤」です。——日高理事長・学長

も行き着くところは「文化」です。創立者はこの大事さを知っていたからこそ、単に法律の条文やシステムを教えるだけではなく、自分の頭で考えて判断できる「知力」を教育しようとした。そのためには日本語でやるのが不可欠だったわけです。

編集部 ■ 甘竹会長が、よくおっしゃっている、自分の意見を述べる、提案をする、と通じますね。

甘竹校友会会長 ● 言われたものをやる時代は、終わりましたよ。コンピュータがどんなに進化しても、やっぱり人間がいないと。私も、学生時代にもっと勉強しときゃ良かったと、いまになって思うね（笑）。

学問もスポーツも、「知力」を身に付ける術は同じ。

日高理事長・学長 ● ただ、大切なのは、勉強だけでは「知力」は身に付きません。

甘竹校友会会長 ● 私の場合、精神力と体力だけはすごいですよ（笑）。

日高理事長・学長 ● 与えられたものを勉強したら、「知力」は身に付くか？「知識」

わが専修大学は誕生以来、さまざまな時代を超え、幾多の逆境をバネに、「知」の発信拠点として機能してきた。

4人の創立者たちの「志」を受け継ぐとともに、かつてない厳しい時代を「知力」で乗り越えるための本学の未来図について、専修大学、校友会、お二人のトップにご意見をうかがい、語り合っていた。

司会 ■ 「アドニス」編集部



熱心に古地図を見る日高理事長・学長と甘竹校友会会長

「東京地表及地下地質図」の「震災予防調査会報告 第百号（丙）上（大正13年）」（大学史資料課所蔵）

は付くけれど、「知力」は付かない。「知力」を付けるための方法は、いくらでもあります。1つのものを掘り下げて、深く考えて研究する。あるいは、スポーツをやって自分の壁から飛び越えて、さらに跳ね返って抜けるとき、やっぱり考えます。このときに「知力」は必要となります。スポーツで第一線の人は限界にぶつかったとき、何とか自分を客観視して、いろんな試みをやる……。学問も同じです。壁にぶつかったとき、教えられて「はい、どうぞ」ではなく、いろんな試みをして、自分で切り拓かない限り、「知

4人の創立者は明治の初めに、「武力」ではなく「知力」で、この国を変えようとした。いまの時代にも、ピタリと合う。——甘竹校友会会長

それはそうですよ。経営者としては、そこを乗り越えなければ。

編集部 ■ その乗り越えるエネルギーとか、「知力」は何だと思えますか。

甘竹校友会会長 ● 私は「考える」ことだと、ずっと思ってきました。こうなったら、どうする。こういうことをやる時には、どうする方法があるか。考えて、考えて。それも短期間で。

編集部 ■ いろんな可能性を考える、選択肢を考える。

甘竹校友会会長 ● はい、「考える」。それを私はスポーツで、卓球部で得たんですよ。

日高理事長・学長 ● それは学問でも、スポーツでも同じですよ。

甘竹校友会会長 ● 卓球の場合、カットマン、ロングマンなど、いろいろ戦型があります。相手に勝つには、どうしたらいいか。卓球から得たことが、企業経営においても生かされています。

日高理事長・学長 ● 甘竹先生は卓球で、「知力」を付けられたんですよ（笑）。学問の場合も同じですよ。いろんな理論で考えても、解けない事案がいっぱいあります。それで一生懸命、考えます。

ひどいときは、1カ月ぐらい考えます。ずっと考えると、たとえば電車に乗ったとき、お風呂に入ったときなどに、真っ暗闇に光がパッと差すように解けるんですよ。ここまで煮詰めないと、「知力」は付かない。これは、スポーツでも学問

## 専修大学校歌

作詞 高野辰之 / 作曲 信時 潔 / 編曲 親泊正昇

(1)	(2)
宮城の北 枢地に立ちて	鳳の翼 両手に開き
礎 固し 我等が大学	世に魁し 我等が大学
質実は姿 真摯は心	剛健の意気に 力行の勇に
学徒幾千 理想に生きて	学徒幾千 希望に生きて
濟世の道 ここに学び	常久の富 ここに萌し
経綸の策 ここに究む	限りなき幸 ここに芽ぐむ

我等が行く道 盤石なせり  
我等が行く手は 光に充てり



校歌を作詞した高野辰之。本学主催「高野辰之の生涯」展が昨年12月1日（土）～12月16日（日）まで、仙台市にて開催されました。

続きは、アドニス62号でご覧になれます。